

バイオグットHGの特長と使い方について



国内産の有機物原料（植物質+動物質）をバイオ21菌（バチルス K12N 株）によって発酵させた有機肥料にバチルス菌活性効果を持つケイ酸資材「ヒナイグリーン」をプラスし、散布しやすいペレットに加工した新商品です。ペレットにより従来品より散布の作業性や圃場での保肥力に優れ、根あたりなどのリスクも低減しています。

- 容量：15kg ★使用の目安：10a 当り 150~300kg（10袋~20袋）
- 特殊肥料 N:3.16 P:3.85 K:3.52（分析例）、ヒナイグリーン混合（10%）。

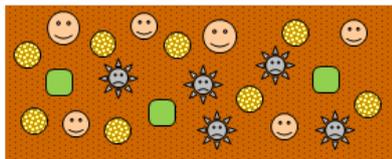
「バイオグットHG」は従来のバイオエースシリーズの持つ“土づくり効果”に「ヒナイグリーン」のバイオスティミュラントとしての効能（バチルス菌のすみか、バチルス菌の賦活効果、硝化能/カリウム溶化能のサポート、2価鉄及びケイ酸供給）をプラスした新規格の商品になります。

バイオグットHGによる土づくり効果

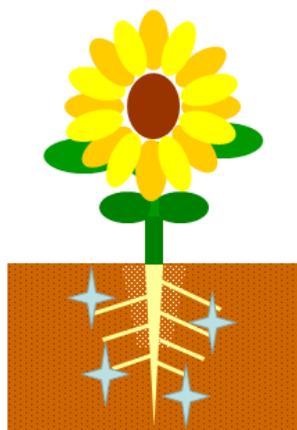
- 😊 バイオ21菌 Bacillus (K12N) 株
- ヒナイグリーン（鉱物）
- アミノ酸など（有機物）



ヒナイグリーンによりバイオグットHG中のバイオ21菌が活性化されます（菌の住処と高pH条件）。



バイオ21菌による静菌効果の他、肥効アシスト（硝化・カリウム溶化能）、ケイ酸溶出がUPします。



土がよみがえります！

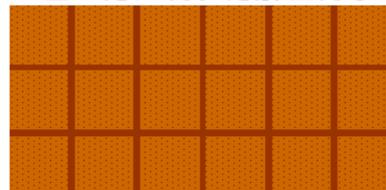
微生物層の回復（バランスの改善）

保水性・排水性・通気性・保肥力の改善

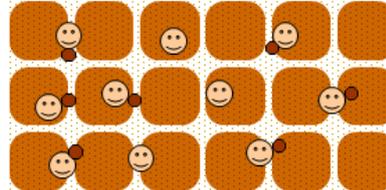
耕盤の破碎（作土層拡大）

ケイ酸・2価鉄供給

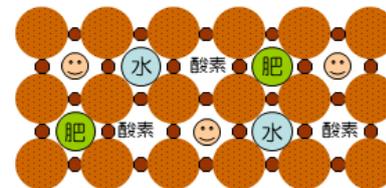
腐植（Humus）
菌の分泌物、分解産物など



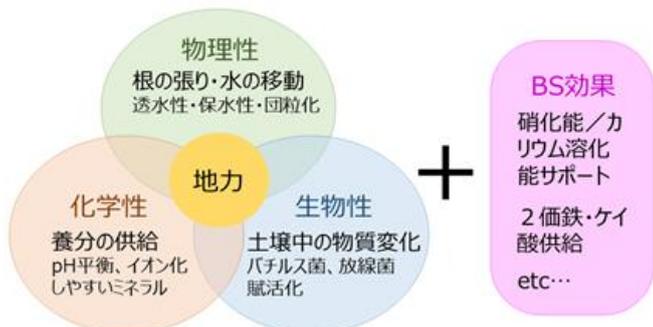
連作畑は土が締まっています。バイオグットHGを投入しましょう！



バイオ21菌の活動で土が団粒化していきます（ふかふかになります）。



「ヒナイグリーン」は地力の3要素である「物理性」「化学性」「生物性」の改善に加え、BS（バイオスティミュラント）の効果を期待できます。



BS（バイオスティミュラント）とは？

植物に供することで「植物の能力と農作物の価値を高める」資材の総称です。BSは作物や土壌環境などその周辺環境が本来持っている自然な力を活用して、

- ①植物の健全さ
- ②ストレスへの耐性（耐塩性・耐寒性・耐暑性・耐乾燥性など）
- ③収量と品質
- ④収穫後の状態及び貯蔵

以上に対して良好な影響を与える物質や微生物およびそれらに類する技術の総称になります。

10アール当たり使用量の目安（赤字は効果が期待できる作物です）
 連作障害の対策として使用する場合は以下の量を目安としてください。
 水稻（ケイ酸補給／有機物分解促進／初期生育時のリン酸補給）：5～10袋
 軟弱野菜類（ホウレンソウ・コマツナなど）：5～10袋
 葉菜花菜類（ハクサイ・キャベツ・ネギ・ブロッコリーなど）：10～20袋
 根菜類（ニンジン・ダイコンなど）：10～20袋
 イモ類（ナガイモ・ジャガイモなど）：10～20袋
 果菜類（トマト・ナス・キュウリなど）：10袋
 まめ類（エンドウ・エダマメなど）：20袋
 草花類（リンドウ・トルコギキョウなど）：10～20袋



ペレットでまきやすい！
 肥料効果も長持ち！

【バイオグットHGのオススメ作物】

①根あたりしにくい！

根菜類、イモ類⇒根あたりしにくいペレットタイプの有機肥料としてオススメです。

②肥料が後半まで長持ち！

まめ類や水稻⇒は地力窒素の依存度が高く、肥料効果が後半まで持続するペレットタイプの有機肥料としてオススメです。

③作業性が良い！

葉菜／花菜類は面積も大きく、散布作業性が重要になります。ペレットタイプで作業性の良い有機肥料としてオススメです。

※「ヒナイグリーン」の配合によりバイオ21菌の活性化が期待でき、硝化作用やカリ溶化も期待できるため肥料効果もわかりやすくなっています。更に「ヒナイグリーン」はガス吸着能もあり、ペレット化と相まってガス害のリスクも低減できます。

【水稻にもオススメ！】

寒冷地や粘質土壌の水田では翌年の湛水時に「ワキ」の発生が問題になります。「ワキ」は前年投入した有機物（主に稲わら）の分解がうまく進まずに春を迎えてしまい、湛水後（還元状態）で急激に分解が進んだ場合に発生します。「ワキ」のガスの主成分はメタンや硫化水素など。稲の根にダメージを与え活着不良や生育遅延を及ぼすばかりでなく、分けつ不良を誘発することで収量減のリスクを高めてしまいます。

●「ワキ」の発生リスクを減らすには？

まずは秋に投入した有機物（稲わら）をできるだけ当年中にしっかり分解できるようなプロセスを組み立て、実行しましょう。

①CN比を調整する（石灰窒素等の利用）※10a当り1-2袋（20～40kg）

投入した稲わらのCN比が高く、土壤微生物による分解が進みにくいいため窒素成分（石灰窒素など）を加えてCN比を下げます（バイオグットHGペレットもCN比が低くオススメです）。

②耕耘する（乾田に酸素を入れる）

更に効率の良い好気性微生物が活動しやすいよう耕耘を数回行い、土壌・有機物にしっかり酸素を供給するようにします（稲わらすき込み後、2～4回耕耘します）。

③好気性菌の活用（バイオグットHGの利用）※10a当り5～10袋（75～150kg）

積極的に好気性微生物（主にバチルス菌）を有機物（稲わら）と同時に投入し、耕耘して腐熟を促進させます。バイオグットHG中のヒナイグリーンはバチルス菌の活動にプラスに作用します。

④土壌中の鉄／ケイ酸含量に注目（バイオグットHGは2価鉄とケイ酸を含有しています）

鉄は水田土壌の還元によって生じる硫化水素による根の障害を防ぐ働きがあり、根の周囲に酸化鉄の被膜を作ることで硫化水素や有機酸から根を守ります。またケイ酸は根の周りの健康状態に大きく影響します。バイオグットHG中のケイ酸も微生物の活動により水溶性となり、稲わら由来のケイ酸と一緒に効きます。

●「バイオグットHG」を利用するメリット（上記の発生リスク低減策の①～④に適応）

- * 「バイテクバイオエース」でおなじみの好気性バチルス菌（KI2N株）の資材である。
- * 比較的低コストで運用でき、ペレット状で散布しやすい。
- * 石灰窒素と相性が良く、同時施用が可能。
- * 土壤分析の結果リン酸の数字が低い傾向にある水田が多い中でリン酸の供給源になる。